

「東下り」の段落構成―教材化研究の一齣―

西 一夫

一 はじめに

本年度前期の開講授業「古典文学講読」では、高等学校で取り上げられる『伊勢物語』の教材化研究をおこなった。このような背景には、これまで教科書教材となつてゐる『伊勢物語』の教材化研究を継続的におこなつて来たことがある。これまで取り上げてきた章段を見直したり、新たに取り上げる章段の教材化分析を行つたりすること、これまでの分析を整理・再考するという目的もあった。

今年度の授業で取り上げた章段は、以下の九段である。

初冠（一段）・東下り（九段）・筒井筒（二三段）・月やあらぬ（四段）・芥川（六段）・梓弓（二四段）・狩の使い（六九段）・さらぬ別れ（八四段）・渚の

院（八二段）

授業では概ねこの順序で章段を取り上げてきた。「東下り」「筒井筒」「狩の使い」「渚の院」は二回分をあてている。前半で取り上げた章段は、すでに論文として発表してきいた章段が多く、後半で取り上げた章段は、今後論文として公開を考えているものである。これらの章段で、必修科目（国語総合）と選択科目（古典）とで採録されている章段はほぼ網羅できていると言えるだろう。

これらの見直しの中で、最も初期に発表した「東下り」の教材分析は、和歌を中心とした内容であり、散文部には十分な考察ができていない憾みがあった。今回の見直しの過程において、段落構成のあり方を起点として教材化と表現分析との関係を中心に課題を整理しておきたい。

二 段落構成のあり方

当該章段の段落構成を結論的に示せば、以下の通りである。

A昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふ

たりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。

B三河の国、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の陰におりゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心をよめ」と言ひければ、よめる。

唐衣 きつつなれにし つましあれば

はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、乾飯の上に涙落として、ほとびにけり。

Cゆきゆきて、駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心細く、すずるなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる 宇津の山への うつつにも

夢にも人に あはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り。

時知らぬ 山は富士の嶺 ひとつてか

鹿の子まだらに 雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

Dなほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりに群れゐて思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚と赤き、しぎの大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」と言ふを聞きて、

名にし負はば いざこと問はむ 都鳥

わが思ふ人は ありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

章段構成は、アルファベットで示したように四段落からなる。A段落では、物語の契機となる出来事が語られ、

東国へ旅立つ背景が示される。B段落では、物語での場面として「三河国」の「八つ橋」が提示され、その場に咲き誇るカキツバタを折句として詠み込みつつ都に残してきた人を想起する。C段落では「駿河国」の「宇津の山」で修行僧との再会からやはり都に残してきた人を想起しつつ、さらに富士山の大きさや不思議さを和歌に詠む。最後のD段落では、武蔵国と下総国とを分ける「すみだ河」で「都鳥」を見ることから旅情を喚起されて川を渡りつつ都を思う一行を描き出して物語は閉じられている。

本来、古写本において段落を分けると言う意識は希薄である。一例を示せば、応永本『和泉式部物語』（和泉式部日記、京都大学蔵本）（注1）では、和歌になる部分では改行がなされているものの、それ以外の散文部分では改行が認められない。つまり、文章のまとまりによって段落を構成するという意識が認められないと入ってもよい。一方、青谿書屋本『土佐日記』（注2）では、日付が変わる毎に改行されている。これは日記という実録性を有する性格を顕著に示していると言えよう。文学史上同じ日記と称される作品においてもこのような相違が認められるのである。

古典作品を読むに際して、内容の構成を段落によって示すことは、作品理解を促進させる意味合いを持つと言

えるだろう。その意味からも段落を設けて教材を行うことは、古典教材の学習において重要な役割を果たすこととなる。

三 段落構成の内実―旅情と境界―

当該の章段は、Aが導入の役割を持ち、続く三つの段落（B～D）が、それぞれ地名を伴う具体的な場面での思慕を和歌によって表現している。その和歌は場面の頂点を形成する役割を担い、歌物語としての体裁を果たしていると言える。

また、BDでは和歌が各一首、Cでは二首の和歌が詠まれ、前者は川をモチーフとした段落、後者は山をモチーフとした段落という関係性も認められる。川と山とは古代社会において境界をなす存在でもある。そうした場面を構成する要素と内容との関係付けを試みることも必要となる。加えて三つの場面に登場する三つの地名（八つ橋・宇津の山・すみだ河）はいずれも歌枕であって旅情を醸す要素を持ち、いずれもが本章段を契機として広がりを持つこととなる。C段落の富士山は古来大きく、

① 異性を恋い慕う心を噴火の煙火に喩える表現

② 山頂に常に雪があることを詠む

の二つの傾向で詠まれてきた(注3)。本章段の傾向からすれば、富士山は前者のような捉え方で詠まれていても問題ないはずであるが、後者で詠まれている点は、この傾向は後代には叙景性を強く持つようになるとの指摘(注3)があることからしても章段の位置づけとして今後さらに検討が必要となる。このような傾向からすれば、各段落において都を思慕する和歌は一首詠まれており、C段落の富士山を詠む和歌は旅における新奇性を捉えた内容として位置付けることができるだろう。

加えて、BD段落は川が場面を構成する要素となっていることと、「乾飯の上に涙落とし」「舟こぞりて泣き」のごとく、いずれも涙を流して場面を閉じているという共通性を持つ。歌言葉として「涙川」があることとの関連が考えられてよい。この言葉を詠む歌が恋歌に集中している事実からすれば、都への慕情という要素と関わらせて考えることができよう。

四 おわりに

以上、解決には至らぬ問題点を列挙した。教材研究としての見直しの上から見出された要素は、今後より具体

的に検討を加えて行く予定である。これらの問題点は、従来「国語総合」の定番教材的な位置づけにある本章段を「古典探究」を見据えた学習課題の設定から見直すという可能性も出てくるだろう。

また、境界性という点では、国境をなすのは「すみだ河」のみで、他の二つとは性格を異にする状況も、単に境界という用語のみで整理することの危険性を孕んでいる。同様なことは、富士山の場面が恋情ではなく新奇的な叙景性を有しているかについても、山の場面で二つの山の存在とあわせて検討が求められている。

教材化研究の楽しさと難しさである。

【注】

- 1 『応永本 和泉式部物語 京都大学蔵』(京都大学国語国文学研究室編、臨川書店、一九七八)参照。
- 2 萩谷朴編『影印本 土左日記』(神典社、一九六八)参照。
- 3 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』(笠間書院、一九九九)参照。

(令和元年九月晦日)

(にし かずお 信州大学教育学部)